



# シビルサポートネットワークニュース

NPO法人シビルサポートネットワーク

2016 年 4 月 30 日

2016 年春季号

## 本号の内容

- 春に語る
  - ・建設系 NPO のプラットフォーム
- 事業報告
  - ・吉川市へ提言
- 活動報告
  - ・第 13 期総会報告
- トピックス
  - ・福島県の災害廃棄物処理
- コラム
  - ・再会はスクーターに乗って
- 新任理事ご紹介
- CSN の動き
- 春季別冊
  - ・「CAFE0-33」参加報告

## □ 春に語る □

### 建設系 NPO の

### プラットフォームとしての役割を考える

代表理事 辻田 満

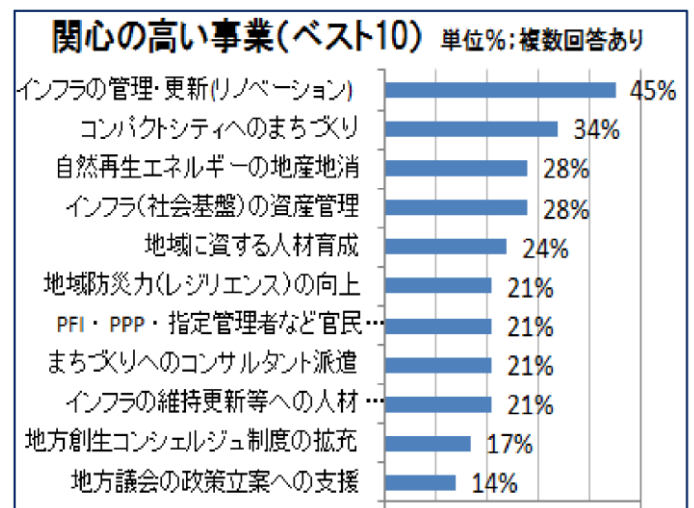
建設系 NPO 法人は全国に百数十団体が活動しているといわれていますがその現況は定かではありません。各組織とも崇高なミッションと高いビジョンで活動をしているのにも関わらず何故社会に認知された組織として顕在化しないのでしょうか？その原因の一端は活動の立ち位置をゼネコンや建設コンサルタントと同じ土俵においているからだとは私と考えています。

建設系 NPO はあくまでも産官学のセクターとは異なるサードセクターである認識が欠けているのでは無いでしょうか？サードセクターとしての役割は今後の社会において間違いなくその役割は大きくなっていくものと考えます。

昨年、当 NPO 加盟するシビル NPO 連携プラットフォーム（CNCP）が地方創生事業として今後取り組む事業としてアンケート調査を会員にした結果は図-1 に示す通りで、こんなにも建設系 NPO が活躍出来る事業があるのかと感心した次第です。中でも最も関心度が高かった事業が「インフラの管理・更新（リノベーション）」でした。（季刊誌 2015 年秋号 Vol 11 号で報告）しかし、NPO として本事業へ参入するに当たっては既存の制度「契約制度」、「資格制度」、「瑕疵制度」が障害となっていることは周知の事実となっています。すなわち、ゼネコンや建設コンサルタントと同じ土俵では事業への参画シナリオの組み立てはあり得ないのです。

国土交通省は平成 20 年度までにインフラの維

表-1 地方創生事業に関するアンケート結果



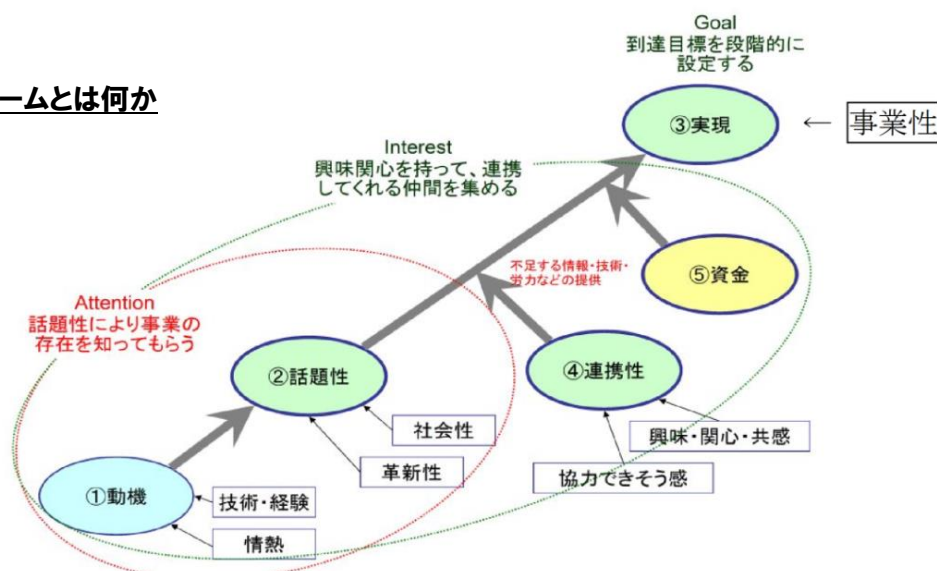
持管理計画策定率 100%をめざしており、その取り組む重点目標は次の①～④が掲げられています。①社会資本の戦略的な維持管理・更新 ②災害特性や地域の脆弱性に応じた災害リスクの低減 ③人口減少・高齢化等に対応した持続可能な地域社会の形成 ④民間投資を誘発し経済成長を支える基盤強化 いままでのインフラの長寿命化計画は技術的な維持・更新

の視点に加えてアセットマネジメントの視点で検討されてきていますが、上記の①～④までは従来の長寿命化計画には全く考慮されていません。そこで、NPOとしてのインフラメンテ事業の参画シナリオとして上記の①～④に対する関与は出来ないでしょうか。そもそも建設系NPOは様々な専門家集団であり豊富な経験と技術を有しています。そこで「土木の知」を活かした「イ

ンフラメンテ・プラットフォーム」としての役割が考えられます。

「インフラメンテ・プラットフォーム」のシナリオ作成にあたっては以下の5つのプロセスの検討が必要となると考えます。（参照：土木学会出版：「インフラ・まちづくりとNPO」）これは土木学会の建設系NPO連絡協議会の事業試行分科会で私が主査として取りまとめたものです。

図-1. プラットフォームとは何か



事業実現に向けてのシナリオとしては動機付けから実現まで図-1に示すように5つのプロセスと技術・経験、情熱、社会性、革新性、協力、共感、事業性等の7つの要因について検討をして行く必要があります。その検討課題を大きく層別すると a) Attention と b) Interest の2通りに集約できます。

a) Attention :

世間一般に向け事業の存在を知ってもらう。その際、それぞれの活動の動機としての技術的経験や情熱を前面出だして、**事業の社会性、革新性**などの話題性をPRする。

b) Interest :

認知してもらった団体・人に活動の協力を促すため、興味、関心を持ってもらい、「協力できそう感」を実感してもらって、不足する情報・技術・労力などや資金の提供を期待で

きる仲間を集める。この**アライアンス(提携)**は**極めて重要**となる。

c) Goal :

実現の最終ゴールは事業性であり、**事業としての継続性が無ければ成立しない**。

本稿では建設系NPOのプラットフォームとしての役割としてインフラメンテを取り上げて考えてみました。建設系NPOのサードセクターとしてのプラットフォームとしての役割はインフラメンテ分野のみならず防災・環境・まちづくり等多くの分野で共通した概念でとらえることが出来ると考えています。今後、CSNもプラットフォームとしての役割を更に具体的に研究してCSNとして建設系NPOとしてのプラットフォームとしての役割を果たして行きたいと願っています。

## □ 事業報告 □

## 吉川市へ提案

## 中川を活かしたまちづくり構想

埼玉県羽生市付近に源を発し、埼玉県東部を南に流下する中川は、総延長 83.7Km で東京湾に注いでいます。その内、約 8Km が吉川市を流れ、江戸時代には吉川周辺は有数の水田地帯で取れた米を江戸に積み出すために中川を利用する舟運も発達し、吉川河岸、平沼河岸は物資の集積地として栄えていました。

中川は吉川にとってかけがえのない財産です。

中川を再び市民が賑わう場所としたい、そして中川の歴史・文化を学び地域のアイデンティティを取り戻したい。なんとかこの中川を生かしたまちづくりが出来ないものか、その可能性を探るこ

とを目的に、2020 年に完成予定の新吉川橋をシンボルとして周辺環境を整備した「中川を活かしたまちづくり構想」を、2015 年末に吉川市に提案しました。

また、本構想には災害時における河川を活用した人や物資輸送を想定した緊急用船着場など整備し、帰宅困難者対策や物資輸送も将来構想として視野にいれています。

吉川市がおかれている現状は、下記の①～④です。

①隣接する三ヶ所の駅前に、年間集客数 2,000 万人以上をめざす巨大ショッピングが誕生（平成

20 年 10 月に越谷レイクタウン、11 月に三郷 IKEA、21 年秋には三郷ららぽーと）。

当然のことながら吉川市の商工業環境は大きな影響を受けることとなります。抜本的な手を打たなければますます吉川市の商工業は衰退していくことが懸念されます。

②中川に沿った平沼周辺地区は、中川の水運や街道の陸運で古くから市街地として、また、商業の中心としてまちの発展を支えてきた地区です。この地区は、伝統的な街並みや文化が残されている反面、生活道路が狭く、建物が密集しているため、市は平成 4 年に「平沼周辺地区まちづくり協議会」を発足し、地区の街並み整備や災害に強いまちづくりについて研究、検討しています。

③プレジャーボート需要の増大に伴い顕在化している放置艇（不法係留船）問題は港湾、漁港、河川等の公共水域の適正利用、災害、安全対策など港湾、漁港、河川の管理上の問題にとどまらず、地域の環境保全対策上深刻な社会問題となってきました。

④首都圏で大規模地震が発生した場合においても、陸上交通網は麻痺することが想定され、災害時の人や物資の輸送におけるルートの確保は、大きな課題です。とくに、吉川市の近隣にはレイクタウンとららぽーとを合わせるとディズニーランドの 2 倍の来場数がある立地にある吉川市としては、河川を利用した人や物資の輸送におけるルートの確保にはまさに適地といえます。

新橋に隣接する吉川市側地区へ道の駅、川の駅を誘致し、これらの施設に付帯する観光施設またはリクレーション施設として、河川敷地を一体的に土地利用計画を進めます。

市の両サイドに全国 1 の大規模商業施設があることから、道の駅、川の駅をどのような関係を持たせるかが問題となります。

新橋周辺地区が未整備状態にあるため、この立地条件を考慮するとレイクタウンのアネックスとしての道の駅、川の駅が考えられます。

レイクタウン駐車場の空満状態の表示、案内、

道の駅に駐車し、レイクタウンへのアプローチも考えられます。市の特産物を販売することも考えられます。

水上バスはこの区間に観光的な活用も取り入れ、水上からアプローチできる市特産ウナギ納涼床等の施設を設置し、河川敷の公園化とともにレイクタウン、三郷駅前と全く異なる次元の施設計画を立案します。

道の駅・川の駅は、コア的なものではなく、文字通りウナギの寝床でも良いのではないかという発想があっても面白いと思われれます。

さらに、首都直下地震などの大規模災害が発生した場合には、大量の緊急物資などを効率的に輸送することが求められます。

県では国が川口市や戸田市に整備した防災用船着場や、県が八潮市に整備した大場川マリーナなどを、河川を利用した水上輸送の核となる舟運輸送拠点として地域防災計画に位置付けています。

この道の駅・川の駅が防災上の新しい拠点とな

る本構想が、今後どのような展開をしていくのかご期待ください。

なお、本構想の実現に向けてCSNの横川義昭会員がメンバーとして参加しており心強い限りです。



## □ 活動報告 □



## 13年間の活動実績を 次世代に継承しよう

開催日時 2016年4月11日(月)15~16時  
会場 オリピック記念青少年総合センター  
105号会議室  
参加者 16名(うち委任状6名)

CSNの第13期(平成28年度)総会が正会員18名のうち16名(うち委任状6名)の参加で開催された。

辻田代表理事より、「13年経ち、建設系NPOとしては珍しく長期間活動を継続できたことをみなさまに感謝したい。ただ、残念なことは後継者と期待する若い世代の入会がないことだ。なんとか新人発掘に努めたい」とあいさつがあった。

つづいて審議に入り、審議事項は議案書通り

承認された。なお、今回は役員改選期にあたり、和久昭正氏が新任理事として承認された。

和久氏は、CNCPの「自治体インフラメンテナンス事業化研究会」メンバーとして活躍されている。



## □ トピックス □

## 土木屋の目からみた震災復興

## 福島県の災害廃棄物と放射性廃棄物の処理に携わって

会員 星野 雅彦

## 故郷：仙台が被災

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震から 5 年が経過し、刺すような異臭の中に広がる凄惨を極めた風景は、人々の記憶の中のものになりつつあるようです。

故郷の仙台東部の実家は倒壊を免れ、家族も無事でしたが、年老いた両親は宮城県沖地震に次ぐ人生二度の大災害に遭遇し、精神的なダメージは計り知れなかったようで、父が被災から 2 年後に他界し、私も落ち込みましたが、この時間の経過でその傷も幾分小さくなったような気がします。

さて、私は、震災のあった 2011 年 11 月より

福島県の浜通り地方での災害廃棄物処理に携わる機会をいただき、その後も災害廃棄物と放射性廃棄物の処理に関する業務を今日まで継続して関わっています。

今回、現地レポートをと思い題材を探し始めましたが、こちらの生活が私の目にはすでに非日常の世界が日常となっているのか、平凡な日常風景が広がっているばかりでした。

ともあれ、メディアに取り上げられるような題材ではお伝えする意味がないので、CSN を意識し、土木屋の目から見た風景の一部を切り取ってみようかと思えます。

## ◇ 災害廃棄物について

災害廃棄物とは、兵庫県南部地震では倒壊家屋等の瓦礫であり、最近の茨城県常総地域の水害では泥と水に浸かった家財等が主なものですが、今回の津波による廃棄物は全てが混在となっておりじつに厄介な代物でした。

とくに漁網が絡まったものの仕分けは、トロンメルはもとより 2 軸のせん断機械もお手上げで、人手による前処理に多くの時間を要したことと、さらに、震災当初は兵庫県南部地震での廃棄物処理でリサイクルが上手く機能しなかったことを受け、リサイクルを全面に打ち出した方針が進められたこと、とくに福島では放射性物質汚染の恐れもあり、リサイクルの目処が立たず緊急の処理が初動からつまづく結果となりました。

さらに、アルバムやランドセルなどの「思い出の品」を丁寧に仕分けることも重要で、重機による効率的な方法が使えず、これも処理の遅れにつながりました。

仙台市のように国の方針を待たずに独自の方法



Fig. 1 福島県内の災害ごみの集積状況

で処理を進めた自治体は、比較的早く処理を終えることができましたが、焼却処理による残さ（灰等）の発生率は約 50%に達しており、これは一般の家庭ごみのそれが 10%程度ですから随分と多く、いかに分別が難しかったかを物語っています。

## 困難をきわめた集積用地確保

処理を急ぐことが全てではありませんが、これまで廃棄物処理に関わってきた経験として、事業の緊急性は、地元迷惑施設設置をお願いする一つの大きなよりどころであり、時間の経過とともに処理施設の受け入れは難しくなると考えていました。

廃棄物問題では言い尽くされた感がありますが、いわゆる、NIMBY (not in my back yard) シンドローム、「みんなのためは理解するがうちの前は嫌だ」という感覚があります。

ただでさえ、汚いとかうるさいとか言われる施設なのに、これに「怖い」などという概念が入ったら、もう施設建設に賛同などいただけません。すでに震災発生後数か月を経過し、廃棄物に関する様々な情報が流布することで、住民側に一定の知識と不安感が芽生え始めた時期では短期間に用地を確保することは極めて難しい状況でした。

さらに、災害廃棄物処理施設の立地をお願いする方々がすでに被災し、耐えられないほどの苦痛を味わっていますから、そこに追い打ちをかけるようなお願いをする自治体の職員も相当な覚悟と苦痛を伴うものでした。

とはいえ、まずは集積所を設けないと復興の一步を踏み出せませんし、震災後はどんどん気候も暖かくなり、生活圏の衛生環境の保全すら危ない状況になりつつありましたから、ごみの集積は極

めて喫緊の課題でした。

### 実態が顕在化せず、処理着手遅れる

震災被害の酷かった被災3県（岩手、宮城、福島）の中での復興の遅れは、現地状況を見る限り福島が最も深刻な状況でしたが、浜通りにある福島第1原子力発電所周辺の多くの住民は避難を余儀なくされておりましたし、そして、これには浜通りの第1原子力発電所の20km圏内に位置する市町村は、国が直轄で管理することになっていたこと、新地町や相馬市、広野町は警戒区域ではありませんが国が代行して処理を進めることになっていたため、情報が一元的に管理されていたこと等からあまり余分な情報が流布しなかったこと等とも思いますので、実態が顕在化するのには随分と後になってからでした。

それでも、比較的まとまりの良かった自治体では、岩手、宮城に遅れること数か月でごみの分別処理業務が発注され、その翌年には仮設焼却処理施設の建設と処理が始まりました。



Fig.2

仮設焼却炉（左図）と災害ごみの処理状況（右図）

### “仮設”焼却処理施設の問題点

ここで仮設焼却炉の設計について少し書いてみます。

一般的な家庭ごみの焼却炉は、毎日のごみ量やごみ質はそれほど変わりませんので施設の規模や燃焼についてある程度予想が可能ですが、津波による災害廃棄物は短期間にとにかく何でも焼却しなければということで、設計パラメータは不定なうえどうしても大規模な施設になります。

別表「国直轄、国代行炉の状況」は平成26年9月時点の情報ですが、国の直轄<sup>\*1</sup>と代行分だけでも、1日当たり数百トンを超える焼却能力を持

つ施設が設計～建設～稼働している状況です。

ちなみに近隣の宮城県の東部衛生処理組合は多賀城市、七ヶ浜町、利府町、松島町の4つの市町村で構成されている広域組合ですが、ここの施設は1日当たり180トンの処理能力です。もちろん、これらの焼却対象物には後述します除染除去物は原則として含まれていません。

そして、焼却炉につきものの環境アセスメントも100t/日を超える規模では条例アセスに該当し、通常の手続きを踏むと2年半の期間を要することになるため、あえて仮設として位置づけ生活環境影響評価のみで対応することとしました。

平常時であれば地域が許容するものではなく、緊急時であればこそ速やかな稼働ができましたが、今後は仮設炉解体後の検証が必要になるかと思えます。

### ◇ 放射性廃棄物について

ここでいう放射性廃棄物とは、原子力発電所から日常的に発生するようなものではなく、今回の

福島第1原子力発電所の事故で東北、関東に降り注いだ放射性物質に汚染されたものを指します。

原子力発電所の事故によりありとあらゆる場所に降り注いだ放射性物質を取り除く行為を「除染」といいますが、これは莫大な労務による地域全体の大掃除です。

### 不安感をあおる、ゆがんだ汚染情報

最初の頃は、放射性廃棄物という名前だけがまるで妖怪か魔物のように一人歩きし、人々に恐れを抱かせましたが、これは、東京電力の地震直後からの対応を隠ぺいしたことと無関係ではないと思います。

以前、20km半径の一部にかかる川内村の関係者から、震災直後に炊き出しや高齢者の対応に追われている中、村内の原発反対のグループが当時は数少なかった線量計を保有しており、その警報で我先に避難する姿を見送りながら腹を括ったという話を聞きましたが、現地では、良く分からないがいよいよ大変な事態が襲いかかろうとしてい

る雰囲気に包まれたようです。

また、低線量に対する健康被害の見解が専門家の中で分かれていることも、情報がゆがんで流布する結果になったと思います。

現在、除染実施の基準となっている空間線量率は $0.23\mu\text{Sv/h}$ ですが、高レベルの放射性廃棄物の表面線量は原子力発電環境整備機構の資料によると $1,500\text{Sv/h}$ となっており、これはじつに基

### ガラス固化体

- ・高さ:約1.3m
- ・直径:約40cm
- ・重さ:約500kg

製造時の数値

放射線量 :約 $1,500\text{Sv/h}$   
表面温度 : $200^\circ\text{C}$ 以上\*

※周囲の環境条件により異なる



Fig.3 高レベル放射性廃棄物（ガラス固化体）

出典：原子力発電環境整備機構資料より

準の650億倍の値で、同じ放射性廃棄物という名称で括れるものではありません。

もともと、環境省の除染関係ガイドラインでは、除染で除去したものは「除去土壌」などの用語を用いていますが、世間ではもっぱら「放射能に汚染されたごみ」などと使われた結果、とりあえず危ないモノとして認識されてしまい、むやみに不安感をあおる結果になりました。

いまでも、関東以西の方と話す、「福島で仕事していて大丈夫なんですか？」などと聞かれますが、福島県内のほとんどの場所は普通の生活環境に戻っています。

### 手間と費用がかかる除染作業

下図は除染作業の一部ですが、屋根を洗ったり、



Fig.4 除染状況

出典：除染関係ガイドライン（環境省）

拭いたり、雨樋の中の土砂を取り除き拭いたりすることで降り注いだ放射性物質を取り除きます。

瓦一枚、樋一本を丁寧に拭き取る作業が除染であり、庭の敷石の洗浄、庭木の剪定、駐車場の高圧洗浄など家一軒の除染には多くの作業員と費用がかかっています。

道路や側溝、田畑、生活森林（林縁から20m程度の範囲）の全てについて除染が行う必要があり、考えただけでも途方もない作業量です。

除染の遅れが指摘されますが、ひたすら労務による作業を効率的に行う特効薬などありません。警戒区域以外では日常生活が営まれているので、それらの生活環境に対して特段の配慮が必要です。

## 除染作業員に最大限の賛辞を

福島県内では、最盛期には数千から数万人の作業員が除染作業に従事していましたし、現在も数千人以上の人々が除染作業を行っていると思います。

彼らは日本全国の様々な地域から参集しており、県内には数百人が生活できる仮設宿舎がいくつも建てられています。

雨樋や側溝の泥を取り除き、草を刈り、庭の落ち葉等を掻き取る、という作業が毎日毎日繰り返され、雨天時は放射性物質を含んだ土砂が流れるのですぐに中止となるのに宿舎の周りには繁華街もなく、という環境で作業員のモチベーションを保つ元請け大手建設会社の苦労は並大抵のものではありません。

除染作業員による様々な問題がマスコミに取り上げられていますが、作業の全体監理に携わってきた私としては、最大限の賛辞を送りたい気持ちです。

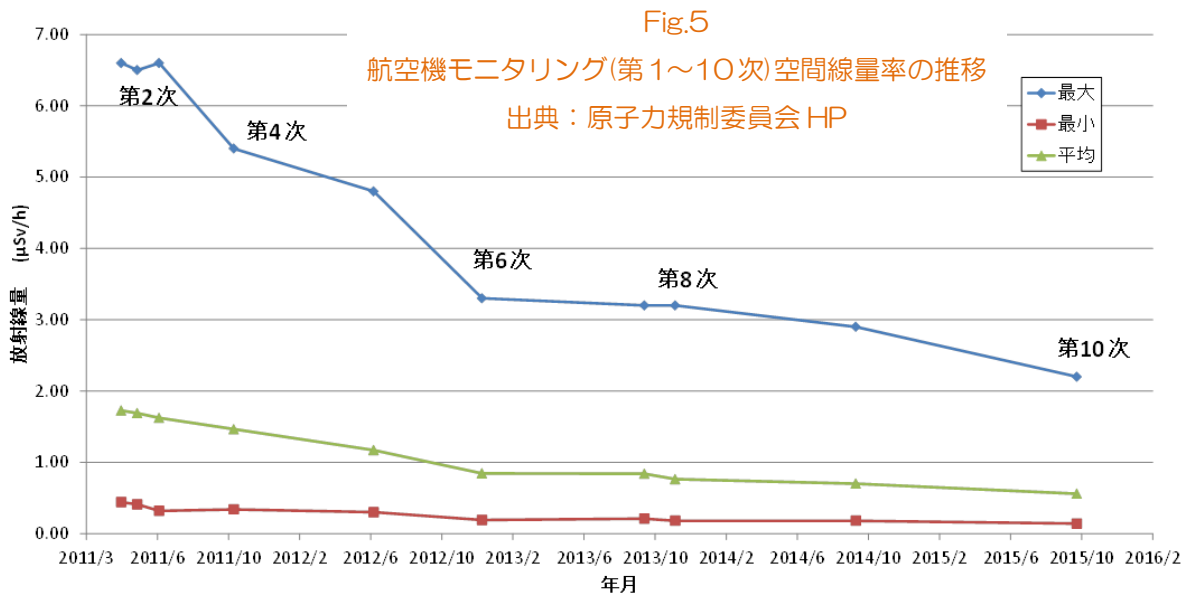
## セシウム除去のはずが・・・

震災直後は、「除染したって放射能はなくならない」、「勝手に家の中に入られては困る」などと言っていた人も、周りの家々が見違えるほど綺麗になるのを見て、「うちも大掃除して欲しい」と言い出すようになり、最近ではセシウムを除去する作業であったはずの除染が、ただの大掃除に成り下がっています。

放射性物質は半減期のあることが知られていません。

今回の原子力発電所の事故由来の物質は、セシウム134 (Cs134) と137 (Cs137) といわれており、Cs134の半減期が2年、Cs137が30年ですので、徐々に空間線量率は低下してきます。

下図は原子力規制委員会がホームページ上で公開している航空機モニタリングのデータのうち、福島県内のある地域の値をグラフ化したものですが、事故当初に比較して大幅に低下していることがわかります。



本来であれば、放射線の空間線量率が低下しているのですから、その測定結果をお見せすれば、「そうか、そんなに下がっていたなら大丈夫だね」となりそうですが、そうはならず、「除染が遅れているのはそっちの都合であり、以前は高かったはずだから少しでもあるなら掃除してくれ」となります。

風評被害の払しょくには、少しでも早く除染を終え、正確な情報を広く公開することが重要ですが、安全に対する個人の主観を優先せざるを得ない場合も多く、今後の除染収束に向けたリスクマネジメントについては、まだまだ検討しなければならないと思っています。



### 情報伝達の重要性を痛感

今回の経験で、初動のスピード感と、人々に渡す情報の扱いが非常に重要だと痛感しています。

ソーシャルメディアの普及とともに、個人がどこからでも多数数に向け情報発信が可能な時代になり、自治体の情報発信方法も、これらソーシャルメディアを利用することで、伝達経路を多重化することで、できるだけ広範囲に伝達しています。

### 情報格差と自治体の責任は

これらの複線化した情報伝達システムは、ネットを使える人と使えない人、さらに使いこなせる人とそうでない人との情報格差、いわゆる「デジタルデバイド」を生み出すことになっています。

そして、ソーシャルメディアは有用情報だけでなく、噂や人々の不安をあおる戯言や流言飛語が

飛び交うものであり、情報の認識、いわゆる「識字（リテラシー）」が必要になりますので、ITを使いこなす能力（ITリテラシー）による格差と情報を使いこなす能力（情報リテラシー）による格差は、自治体内部においても顕著化しているうえ、情報発信元である自治体側に課せられた責任は非常に重いものとなると思います。

### 終わりに

今後、NPOのような市民側の立場の人たちも自らの専門とする部門に加えて、ITに対するより深い見識が求められていると思います。

私自身、今年が福島での業務の最後の年になるでしょうが、これからも技術屋として災害廃棄物処理、除染の行方を見据えていきたいと思っています。

### 別表 国直轄、国代行炉の状況（平成26年9月時点）

	自治体	規模 (t/日)	炉形式
国直轄	南相馬市	200	ストーカ式 (H27.5稼働開始予定)
	浪江町	300	ストーカ式 (H27.6稼働開始予定)
	富岡町	500	ストーカ式 (H27.1稼働開始予定)
	檜葉町	120	(未定)
	葛尾村	200	ストーカ式
	川内村	7	ストーカ式 (H27.1稼働開始予定)
	飯館村(小宮地区)	5	流動床
	飯館村(蕨平地区)	240	流動床、ストーカ式
国代行	相馬市(新地町含)	570	ストーカ式
	広野町	80	シャフト炉式ガス化溶解 (H27.4稼働開始予定)
	南相馬市	200	(未定) (H27.12頃稼働予定)
	合計	2,422	

#### ※1

今回の災害により被災した地方公共団体から、国がより積極的な役割を果たせるよう、市町村域や県域を超えた広域での処理を推進すべきとの意見や、国が直轄で災害廃棄物を処理すべき等の要望が出されたことから「東日本大震災により生じた災害廃棄物の処理に関する特別措置法」（平成23年法律第99号）（以下代行法という）が出され、平成23年8月9日に衆

議院東日本大震災復興特別委員長から第177回国会に提出され、平成23年8月12日に成立、平成23年8月18日に公布・施行された。

これにより、20km内の警戒区域内の市町村の災害廃棄物処理は、環境省が直轄で処理行うことになり、さらに新地町・相馬市・南相馬市・広野町等については、国が代行して事業を進めることになった。

## □ コラム □

2015年8月～10月 フランス滞在日記より

## 再会はスクーターに乗って

シビルサポーター 西島 葉子

【10月11日の日記】

27年前にパリでアパートマンを借りるときに保証人としてお世話になったフランス人の友人夫妻、当時パリの郊外の静かな田園に住んでいたが、その後、連絡先がわからなくなってしまっていた。

再会は無理かとあきらめかけていたものの、パリの滞在も残り10日余りとなって、その時に世話になったお礼を言えずに帰るのはやはり心残りだった。

そこで夫のGが当時開業していた歯科医院を尋ねてみたもののそこにはなく、そこでインターネットで探してみることを思いつき、ようやく見つ

けることができたものの、聞けば二人は離婚したとのこと。長い時間を経て私たちの人生も変化しているのだ。

フランスは実は階級社会だ。この友人夫妻はいわゆるBCBG(良い出自のお嬢さん、お坊ちゃん)である。この友人夫妻の両親に会ったことがあるが、本来であれば一介の東洋の女の子などは、彼らの属する社会から見ればまさに圏外、言葉の端にそんな雰囲気を感じたこともあった。

ただ、そのころの若い二人は、自分達はリベラルであるという意識が高く、オープンに迎え、受入れてくれた。キャビンアテンダントだった妻の

仕事も兼ねて友人夫妻は何度か日本にも来ているので、日本に関心を持っていたことで親しみを持ってくれたのかもしれない。

いずれにしても、面識はあったものの、私の身元も深くは知らないはずの彼らが、それでも信頼してくれて、「アパートマンを捜す手伝いはできないが、保証人にはなれる」と言ってくれた。そんな経緯があって、おかげで住まいを借りることができたのだ。

妻であった友人S、夫の歯科医Gとは離婚していたが、彼が電話番号を教えてくれたおかげで連絡がついた。今日はその友人のSと夕食の約束をしている。待ち合わせの時間と場所を確認しようと電話をしたところ、な、な、なんとスクーターで迎えにいくと言われた。

ギョギョッ！ ススススクーター！ これでも若い頃は友人のオートバイの後ろに、それもスクーター姿で乗ったこともあるお転婆だった。「いったい大丈夫かしら?!」なんて言っていられない。ここは信頼するしかない。

「あなたのヘルメットもあるから心配しなくて

大丈夫よ！」と言われ、電話を切ったものの、ちょっとドキドキしている。

さて、夜の7時半、待ち合わせは坂を下りたところにある地下鉄モーベル・ミュチュアリテ駅の広場、ほんとうにSはスクーターで迎えに来た。先日、拙い私のフランス語にもかかわらず、電話で1時間以上も近況を語り合い、お互いが再び繋がったことを喜び合った。「この5月に日本に行くチャンスがあって、とにかく会いたくてあなたの連絡先を捜したけれど、どうしてもわからなかったの」と悔しがっていた。残念に思ったのはこちらと同じ。でも、こうして再会しているのだから、それも良しとしよう。

ヘルメットを渡され、何十年ぶりにスクーターの後ろに乗り、パリの街を走る。この時間帯は日曜の夜とはいえ交通量は少なくない。セーヌに浮かぶサン・ルイ島を横切り、バステューユ広場のロンボワン(ラウンドアバウト型交差点)を回り、行き交う自動車の間を縫って次の道へと曲がる。運転は慣れているようだ。最初はちょっと怖か

ったが、次第にオートバイの要領も思い出して愉しくなってきた。

パリの街をスクーターで疾走するスリル、思いがけない冒険に心が躍る。バスティーユ界隈の気取らない雰囲気のある道をどんどん進む。次第にどこを走っているかわからなくなってきた。



「私の家はもう少し先。今日は家に来てもらおうつもりだったけどピストロを予約してあるの。

気軽なお店なのよ……」ヘルメット越しに前と後ろで言葉を交わす。「ちょっと、ちょっと、前を見てる？」

👁️の評判のピストロは彼女の住まいからほど近く、8時にはすでに店は満員状態で混み合っている。

を見せてもらううちに電話があり、21歳の三男が鍵を取りに寄るといふ。生まれたばかりの頃だったというが、長男、次男と一緒に遊んだので思い出しても、三男の印象は薄い。

そこに彼女に似たイケメンが登場。礼儀正しく感じが良い好青年、まだ学生だ。「素敵な青年ね。母親の教育がよかったのね」とSにそっと耳打ちすると、「そうですね！」と自慢げににっこり笑った。

他の二人、長男は弁護士、次男もIT系企業に勤めて現在カリフォルニアにいる。三男は末っ子で近くにいるので、可愛くてしかたないのだ。

話はとどまることなく、共通の友人のこと、昔の思い出、Sが5月に東京に行った時のこと、まだまだ四半世紀を埋めるには時間が足りないが、夜も更けて日付も変わる頃だ。

👂り道もスクーター。交通量が少なくなった日曜の静かな夜の街をぐんぐんスピードを上げて疾走している。信号で止まって大きな通りにでると現在地がわかってきた。セーヌ川の反対側なので、

前菜には牛の骨髓、充分な量があるので一人前エアすればよいとの店の提案どおり、ボリュームのある一品だ。メインは骨付き羊のロティ、デザートまでしっかりと味わったところで、最後は意見が一致して割り勘にした。

そうそう、料理と一緒にワインも注文するが、さすがにボトルではなくデキャンターではある。

「えっ！いいの？」「だってあなたも飲むでしょ、このぐらいは平気よ」と普通の飲み物のつもりだ。フランスでも飲酒運転は取り締まられるが、生活習慣の範囲として許容されるのだろう。もし日本だったら、もちろん彼女を断固制止するが。

👥人ともよく食べたが、それよりなによりとにかくよく喋った。同世代の気の置けない女友達同士の話題、まずはお互いの生活ぶり、家族のこと、親のこと、子供のこと、兄弟姉妹のこと、従兄弟のこと、洋の東西、共通する話題だ。

彼女の側の家族は会ったことはあるが、四半世紀を経ての子供たちの成長には眼を見張る。写真

再びノートルダム寺院を右に見ながらサン・ルイ島を横切り、セーヌ左岸を進む。最後は細くて急な上り坂をぐいっと登って、アパルトマンの前まで乗せてきてくれた。

「部屋を見てみる？」と聞くと興味津々、彼女の好みの内装を見て「なかなかいいじゃない！」

👁️互いに住所、電話番号、メールアドレスを書き取り、さて帰る段になったところ、Sはスクーターの鍵がないと慌てた。バッグをひっくり返し、あちこち探して大騒ぎした挙句に最後にポケットの隅からでてきた。「あらあら、私と同じね。いつも探し物して、これっておばさん症状ね」と、思わず顔を見合わせて噴き出した。

「これからは、ちゃんと線を切らないようお互いにコンタクトしましょう」「また来てね」「今度は東京かパリか、すぐにまた会いましょう」と、二人とも名残惜し気に頬を寄せて別れの挨拶を交わすと、Sはまた颯爽とスクーターに跨って帰っていった。

※ブログ <http://carpentras.exblog.jp/>

## 新任理事ご紹介

### CSN 理事就任にあたっての抱負

(株)高島テクノロジーセンター顧問 和久昭正

私の経歴は(株)フジタで現場管理を16年、研究所で15年過ごしたあと中央復建コンサルタンツ(株)に転職して4年、名古屋工業大学で5年過ごし、現在は(株)高島テクノロジーセンターにてアセットマネジメント及び新人研修担当している。

抱負としては、CSNにおいて是非達成したいものとして、中小自治体が抱えるインフラの維持管理問題の解決がある。

具体的には、維持管理に関する技術支援と財政支援である。技術支援は、土木技術者の不足している中小の自治体に対して行っていきたいと考えている。なお橋梁の維持管理は、現在殆どの自治体で長寿命化計画が策定されており、今後は維持管理の対象がトンネルに移行するものと考えられる。



和久昭正氏

トンネルについては私の専門分野でもあるので、協力できるものがあれば積極的に活動していきたい。

また、財政支援は、PFI (Private Finance Initiative) の導入と、公会計の整備に関する検討である。これらの検討については、VE (Value Engineering) による検討課題の抽出や、AHP (Analytic Hierarchy Process) を用いた着手優先順位の決定法等のオペレーションリサーチを駆使して問題解決に当たっていきたいと考えている。

なおCSN以外で行っている社会貢献活動としては、技術士会の公共工事の監査、国土交通省の紛争調停委員、縣市サッカー協会長、ものづくり大学の非常勤講師等がある。

これらの活動を通して得られる人脈や情報を通じて活動範囲を広げていきたいと考えている。

### 次回サロンのご案内

#### 第22回CSNサロン

日時：平成28年7月11日(月)

15時～17時 講演

17時～ 懇親会

ゲスト：平野廣和氏

テーマ：産学連携

会場：NYC (センター棟104)



## CSN のうごき

行事・イベント	実施日	参加者
事務局定例会議	2/1、3/4、4/4	辻田、宇佐、高橋
シビルNPO連携プラットフォーム運営会議	2/9、3/8、4/12	辻田
共創プラットフォーム事業化研究会 (フェーズⅡ)	2/5、3/9、4/13	辻田、宇佐、高橋
第13期総会	4/11	
活動報告季刊誌第13号発行	4/30	

## 編集後記

- 福島で災害廃棄物処理に携っている星野会員から、現場報告をご投稿いただいた。  
東日本大震災については、BCPの学習としてかなりの各種報告や資料類を読んできたが、現場から生の声としての報告を読むのは、これが初めてです。ご多忙のなか、貴重な文章をまとめていただき、こころから感謝申し上げます。
- さらに、シビルサポーターの西島さんからは、パリ滞在日記の一部をいただきました。  
スクーターに乗って、骨付き羊のロティを食べにいくという、映画の一シーンのようなしゃれた一文です。  
秋季号には、フランスの田舎の家庭料理をご馳走になり、まさに「フランス真髓」を堪能するという、うらやましい報告が登場する予定。どうぞ、お楽しみに！
- さらにさらに、出崎さんから「CAFEO」参加報告も届きました。ことしはペナンで開催されたとのこと。毎年恒例の出崎原稿はボリュームたっぷりです、このままでは、メールに載せると容量オーバーになりそうです。そこで、シビルサポートネットワークニュース初の別冊としてみなさまにお送りすることにしました。
- 西島さんの優雅なパリ紀行にあやかろうと、花をめで、初物の空豆を焼いて食してみました（残念ながら、舞台は国内です）。  
(事務局：高橋 肇)

